

田中ゼミ葉山芝崎海岸磯生物観察録

平成 14 年 11 月 7 日

花岡利季

私たち田中ゼミでは自然復元の勉強のため、植物図鑑の作成、「環境アセスメントここが変わる」と「環境白書」の輪読、卒論テーマはそれぞれ異なりますが、アマモのハビタットとしての機能や、沖縄普天間に住むジュゴンについて手がけています。これらの一環として8月10日に、神奈川県三浦郡葉山町芝崎海岸を訪れ、葉山しおさい博物館館長の池田等先生の親子生物観察会に同行させていただき、磯に住む生態系の一部を観察してきました。葉山芝崎海岸とは、天皇の御用達が付近にあるインベリアルビーチと呼ばれる場所で、その生物多様性から天然記念物として扱われており、海外では有名な地であります。この度、田中ゼミのフィールドワークの一例として葉山芝崎海岸磯生物観察録を紹介させていただきます。

芝崎の湾は護岸によって整備されていました。護岸には窪みなどの、カニや微生物にとって隠れ家となる場所がなく、自然に大きなダメージを与えます。人間にとって安全で便利ではありますが、磯が削られることによって、昔に比べ種の減少も確認されているのが事実です。このような人間による開発をこれ以上上げないようにするのはもちろん、護岸を生物が住めるものにする必要があると教わりました。



生物が潜む小岩を踏まないよう気をつけて探したところ、さまざまな生物が岩の裏、磯の陰などにいました。その中から一部を紹介します。



この中で面白かったのはイソクズガニ *Tiarinia corniera*、自分の体にゴミを貼り付け、自らを擬態としているところで、一見蟹だとわかりません。パフンウニ *Hemicentrotus pulcherrimus* は体に貝や海藻をつけて隠れています。美味として食卓にあがることもあります。タツナミガイ *Dolabella auricularia* はウミウシに似ていますが、アメフラシの仲間、幼年期は貝殻をもっており、刺激を与えると紫色の液を煙幕のように出して身を守ります。図のスソヨツメタカラガイ *Cypraea stolidus* Linne は肉を貝の周りに覆いかぶしている状態です。ヒジキ *Hizikia fusiformis* が大量に岩に張り付いていました。しかしそれらの多くは干出した状態で、海水に浸らず乾いて死んでしまっているものもありました。ヤツデヒトデ *Coscinasterias acutispina* は腕が8本の固体だけではなく、他にも6~10本あるものもあります。ヤツデヒトデは成長すると体が半分に分かれ、その後腕を再生して2つの個体となるそうです。見た目はグロテスクですが、漢字で書くと「八手海星」でなんとなく美しい感じがします。

今回、このフィールドワークによって、多くの先輩や先生方、環境系企業の方々がおっしゃるように、生物の名前や性質、フィールドワークの方法などの知識を卓上で覚えるのではなく、経験として肌で覚えることの重要性を理解しました。生態系保全のための手法として法律、条令、アセスメント、調査、教育、地域社会との連携などやらなければならないことは数え切れないほどありますが、生物を知ること基礎中の基礎として理解しておくことが今後私たちにとって鍵となるのではないのでしょうか。